

一 般 演 題 抄 錄

22. 前立腺肥大症に対する高温度療法

杉山 高秀 紺屋 英児 宮崎 隆夫
栗田 孝 田原 秀男* 今西 正昭**

近畿大学医学部泌尿器科学教室・*神原病院・**若草第1病院

当院及びその関連施設において、1992年7月より経尿道的前立腺高温度治療（以下 TUMT と略す）が導入され、1993年2月までの短期治療成績を報告する。対象は、TUMT による治療を行い、3カ月後の経過観察をし得た40症例である。治療方法は、灌流冷却を有したマイクロ波による経尿道的加熱であり、マイクロ波照射点の直下に尿道温度センサー、直腸内プローブには3点の温度センサーがあり、尿道最高温度44.5°C、直腸最高温度42.5°Cに設定されている。

3カ月後の自覚症状は、WHO シンプトンスコア0～35点と、WHO-QOL の変化で評価した。シンプトンスコアでは、刺激症状・閉塞症状の両方とも有意に改善した。また QOL の変化でも3カ月後には、かなりの症例で満足度を得た。他覚所見では UFM において評価したが、AFR・MFR とも有意に改善しており、残

尿量も減少していた。しかし、超音波計測による推定前立腺重量には全く変化が認められなかった。ここで自覚症状スコアの減少率と治療中に前立腺に与えられた総熱量すなわち平均 watt 数との相関を調べてみると、平均 watt 数が約 20 watt 以上に上昇しないと治療効果は得られにくいものと推察された。前立腺肥大症を中葉肥大と側葉肥大症例とに分け、治療成績を比較したところ中葉肥大に対する TUMT の治療効果は低いと考えられた。

TUMT の副作用として高率に生じ問題となるのが治療直後の尿閉であり、約60%の発生をみた。しかし殆んど症例では3日後に離脱できた。前立腺重量では 30 g 以上の症例で高率に尿閉が発生したが、尿閉の有無は、3カ月後の症状の改善度には無関係であった。

以上の如く治療3カ月後においては、自覚症状、他覚所見ともに有意の改善が得られた。